

映画時評

サボー・イシュトヴァーン監督『サンシャイン』(Sonnenschein, Napfény íze)

盛田 常夫

「メフィスト」でオスカー賞受賞のサボー・イシュトヴァーン監督の久々の大作。1999年末に封切り。5カ国の共同合作で、舞台はブダペスト。19世紀末のハプスブルグ時代末期からハンガリー動乱直後の1960年代にいたるユダヤ人家族の歴史の変遷を扱った大作である。

ブダペスト黄金時代

ハンガリーの現代史は1967年のオーストリア - ハンガリー二重帝国発足（歴史的和解）に始まる。日本の明治維新とほぼ同じ頃。ここからハンガリーの近代国家建設が開始された。日本と同様に、教育制度はドイツを真似て、ギムナジウム制度が導入され、とくにブダペストに創設されたギムナジウム（ミンタ・ギムナジウム、レアル・ギムナジウム、ファシヨリ・ギムナジウム）から20世紀の科学の発展に貢献した天才たちが生まれた。20世紀初頭のブダペストから数多くの天才が生まれたことは、今日でも科学史のなかの謎とされているが、その背景には「ハンガリーの維新」から始まるハンガリー社会のダイナミックな隆興があった。当時のハンガリー、いやブダペストは世界史の中でも、極めて特殊な位置を占めている。歴史的和解から第一次世界大戦でハプスブルグ帝国が崩壊するまでのほぼ50年が、ハンガリー（ブダペス）の近代黄金時代なのだ。

そして、そこで育った天才たちが最後にアメリカに渡り、原爆開発に従事することになる。「維新」をともにしたハンガリーと日本は、第二次世界大戦で原爆を通して出会うという悲劇的な関係にある。

ユダヤとの混交

ハンガリーが生んだ天才のほとんどがユダヤ系の同化ハンガリー人であることは良く知られている。18-19世紀を通して、ロシアやポーランドで迫害されたユダヤ人が、比較的民族差別の希薄だったハンガリーに流れ込んだ。二重帝国創設以後、ハンガリー政府はユダヤ人の経済的才覚を活かすことで、ハンガリー帝国の興隆を図った。経済発展に貢献したユダヤ人実業家は、貴族の称号を与えられ、一定の社会的地位が確保された。ノイマン、ヘヴェシ（ノーベル化学賞）、ヴィグナー（ノーベル物理学賞）などは裕福なユダヤ人実業家の子息として、高校卒業後はドイツの大学へ留学している。

まさに、「サンシャイン」はこうしたユダヤ人実業家として成功し、ハンガリーに同化し

つつ、そのなかで様々な社会的軋轢にぶつかるユダヤ人家族の歴史変遷を、70年の歴史的時間を通して見せてくれる。もちろん、この映画はドキュメンタリーではないから、そのような家族が実在したのかどうか確かではないが、少なくとも三代の息子たちの物語は、それぞれの時代の同化ユダヤ人が直面し、遭遇した事件を典型化したものだ。

反ユダヤの源泉は何か

ユダヤ人にたいする寛容さにもかかわらず、ハンガリー帝国には厳然としたユダヤ人差別が存在した。政治や行政へユダヤ人が加わることは厳しく制限されていた。だからこそユダヤ人は実業の道を究め、子息に高い教育を与えることで、社会的な地位を確保することに懸命だった。他方、一般庶民はユダヤ人家族の経済的成功を妬み、為政者がそれを巧みに操ることで、自らの政治体制の安定化を図った。

主人公は Sonnenschein (ゾンネンシャイン) というドイツ系ユダヤ人の姓をもつ。曾お爺さんが発明した同名の薬用酒で経済的な成功を収め、息子(イグナツ)をウィーンの大学へ留学にだす。大学を卒業したイグナツはブダペストに戻り、裁判官の道を歩み始め、その有能さが評価されるようになる。ところが、高等裁判官になるためには、ユダヤ系の姓が障害になると上司に諭される。そこで、兄妹3人で一緒に新しい苗字を考え、Sors(Fate、運命) という姓を選ぶ。この改名の様子が明るく描かれているのを見ると、当時の改名は自由意志が尊重されていたようだ。この改名でイグナツの昇格の道は開かれた。

3人で育った兄妹のうち、妹は実は従姉妹だった。「妹」は次第に従兄に恋するようになり、やがて結婚するが、母は禁じられた婚姻だと「運命」を嘆く。シューマンの「ファンタジー」とハンガリー民謡「春の風」のバックグラウンド・ミュージックが交互に流れ、全編を通して、運命の出会いと美しい情景を飾っている。

ハプスブルグの崩壊から社会主義政府へ

やがて第一次世界大戦が勃発し、ハプスブルグ帝国が崩壊する。連合国によるハンガリー分割が、ハンガリーに民主政府を樹立させる。その崩壊の後に、ロシア革命に続き、歴史上二番目の社会主義政府が樹立される(1919年)。イグナツはブルジョア政府の官吏として自宅に軟禁されるが、イグナツの弟は医師として、社会主義運動に参加する。民主政府の樹立にともない、多くのユダヤ人が差別撤廃を目指して、政治運動に加わり、社会主義政府の樹立にも多くがかかわった。バルトークやコダーイ、ルカーチ、あるいは高校生だったレオ・スィラードも、社会主義政府の樹立や運動にかかわった。

この社会主義政府は3ヶ月で崩壊し、その後に右翼軍事政権(ホルティ政権)が樹立される。この政府は社会主義者を片っ端から逮捕し、拷問し始めたのだが、とくにユダヤ系の活動家が標的になった。社会主義政府を樹立を主導したユダヤ人への仕返しだった。

もっとも、ノイマン家などは、社会主義政府樹立とともにウィーンに逃れ、軍事政権樹立の後にブダペストに戻っているから、すべてのユダヤ人が迫害された訳ではない。しか

し、この時から大学には定員法が施行され、大学定員に占めるユダヤ系学生の数、人口比率を超えないことが決められた。

イグナツの弟はフランスに亡命し、最初の主人公イグナツは不遇時代を迎え、ほどなく他界する。

両大戦間時代

時代は変ってホルティ政権時代。イグナツの息子（アダム）が成長し、学校でのユダヤ人いじめから、兄弟でフェンシングを習い始める。アダムはやがて全国制覇を達成するほどの腕前になり、エリートのフェンシングクラブ（軍人クラブ）への入部を勧められる。そうすれば、オリンピックへの出場も可能になるからだ。しかし、ここにも障害があった。ユダヤ教からカトリック教へ改宗することが条件だった。エリート・クラブにユダヤ人が入ることは許されなかったからだ。

ここでも二人の兄弟はカトリックの教えを受けに行く。改姓と同じように、何のわだかまりもなく楽しく教えを受けるが、アダムが結婚のために改宗教育に来ていた別の女性にアプローチして、自分の恋人にしてしまう。

そして、1936年ベルリン・オリンピック。ヒットラーが開会宣言をおこなったこのオリンピックで、ハンガリーのフェンシング・チームが優勝する。これは史実通り。アダムはハンガリーの優勝に貢献し、ブダペスト西駅への凱旋帰国と市内パレードが、アルヒーフとロケーションの重ね合わせで描かれる。

ハンガリー団体勝利の後、ベルリンのロビーでハンガリー出身のアメリカの実業家からアメリカへの移住を誘われる。また、アダムの弟の妻がアダムを誘惑し、一緒にアメリカへ逃避しようと誘う。しかし、アダムはこの両方の誘いを断る。1938年から1939年にかけて、ハンガリーでもユダヤ人迫害が強まり、ドイツの占領とともにユダヤ人の収容所への送還が始まる。アメリカ行きは当時のユダヤ系ハンガリー人にとって、生きるか死ぬかの選択であった。

第二次世界大戦が勃発し、ユダヤ人の法的規定が発布された。事細かにユダヤ人の条件が定められ、公職からの追放が決められた。しかし、国家に貢献した者は例外規定を受けられる条項があり、オリンピック優勝者もそれに該当した。にもかかわらず、アダムは収容所へ連行され、一緒に収容された息子の目の前で看守のリンチを受けて死亡する。それはアウシュビッツではなく、ハンガリーの収容所での出来事だ。

映画と直接に関係しないが、1993年にノーベル経済学賞を受賞したハルシャーニイは、当時、ブダペスト大学の学生で、指定の列車に乗るように駅へ集まるように指示された。映画のアルヒーフにも出てくるが、黄色いリボンを付けたユダヤ人が列を作って、列車に乗り込む。ハルシャーニイは列車の中でリボンのついたセーターを脱ぎ、厚手のコートで羽織って、乗降客に混ざって駅を脱出した。こうして戦時をくぐりぬけたハルシャーニイが最終的にハンガリーを脱出したのは、共産党政府が樹立された直後の1950年である。

このように収容所送りを逃れた人もいるが、優れた才能をもった科学者やスポーツ選手も、その多くがドイツ占領下の収容所送りで、アルシュビッツあるいはハンガリーの収容所で命を絶った。アダムの事例はその典型例である。

ナチからの解放と共産党政権の樹立

ソ連軍によるハンガリー解放で、収容所で生き延びたユダヤ人が自由を獲得する。多くの若者は共産党に入り、新しい時代の担い手になろうとする。1919年の社会主義政府樹立の時と同じ構図である。アダムの息子（イヴァーン）も、父を収容所で失った悔しさを胸に、共産党の活動家になる。

ところがまたまた歴史が転換する。戦後の一時的な平和が一転して、ソ連とアメリカの覇権争いが激しくなり、冷戦が始まる。ソ連共産党と占領した諸国の共産党の内部で、アメリカやイスラエルのスパイ摘発運動が展開され、共産党員が共産党員を告発し合い抹殺する事態が展開する。イヴァーンは有能な共産党員として、スターリンの誕生日を祝うオペラハウスでの式典の司会を務めるほどになり、他方で同僚のユダヤ人をスパイとして摘発する仕事も請け負わされる。

これも映画と関係ないが、ビタミンCの発見でノーベル賞を受賞したセント-ジョルジは、戦中は反ナチの地下運動家で、戦後の民主化の中で政府の科学政策担当の指導的な位置に就いた。彼はユダヤ人ではないが、支援者の実業家がスパイ摘発を受けた1948年初めに、アメリカへ亡命した。同じくユダヤ人ではないが、反ナチ運動を担ったベイ・ゾルターン（通信工学）も、1947年にハンガリーを離れた。

1947年からスターリンが死ぬ1953年まで、スターリンの絶対化が進行する悪夢のような時代が続いた。国中がオウム真理教に感染した状態だと考えれば良い。明らかにこれはナチズムの完全な裏返し現象だった。

1956年動乱

スターリンの死後、世界の緊張が緩和する時代に入った。1956年秋はまさにそのような時期の始まりで、束の間の自由を謳歌できる瞬間だった。しかし、突発的な事件から動乱が始まる。社会の緩みがそれまで鬱積した不満を爆発させた。スターリン時代から共産党のあり方に疑問を抱きつづけていたイヴァーンは、動乱の中で自由化への道を訴え、大衆を扇動する。

動乱で国外に逃げた若者は20万人に達する。当時、ブダペスト工科大学の助手だったオラー・ジョルジュはこの時に国外に逃れ、1994年のノーベル化学賞を受賞した。裏話になるが、オラーは動乱の側ではなく、体制側を代表する学生委員会にいた。また、工科大学学生だったグローヴ・アンドラーシュ（前インテル会長）は友人とオーストリア国境へ逃げた。

動乱の扇動者は残されたフィルムから特定された。保安隊や共産党幹部のリンチ殺人に

かかわった者は死刑判決を受けているが、余程の残忍な殺人を犯している証拠がない者は、1960年代の米ソ雪解け時代に釈放されている。イヴァーンもまた、比較的早く拘束を解かれた。

イヴァーンが釈放されて真っ先に行った所が、「苗字改姓」受付事務所だった。「改名の理由は何ですか」と聞かれるが、一言で答えられるはずがない。Sonnenschein に戻ったイヴァーンは、太陽の光を体一杯に浴びて、すがすがしい気持ちで、再出発の一步を踏み出す。

フィルムを通して、古き良き時代のブダペストが映し出される。ハプスブルグ時代のカフェが、第二次世界対戦後にセルフサービスの食堂になる様子など、細かな時代配慮が施されている。

美しい映像と音楽に似合わず、テーマは重い。これはたんにユダヤ人問題ではなく、20世紀に犯した人類の犯罪の集大成を見るようなものだ。ナチズムにしてもスターリニズムにしても、そして反ユダヤ主義にしても、共通していることは社会的少数者を生け贄にすることで、為政者が自らの支配を守るということだ。これはすべての「いじめの構造」に共通する。人類がこの「いじめの構造」から脱却するのは何時のことか、そんなことも考えてみた。